

何もないなあ。

FROGMAN



1971年、東京生まれ。本名：小野亮（おの・りょう）。映像ブランド蛙男商会・代表。映画『白い船』の仕事で島根県を訪れ、そこで運命の人と出会い結婚。これを機に島根に移住。2004年、初めて作ったWEBアニメ『菅井君と家族石』が人気爆発。2007年3月には、劇場版『秘密結社 鷹の爪 THE MOVIE ～総統は二度死ぬ～』でスクリーンデビューを果たす。この間、「島根は鳥取の左側です」のフレーズ入り島根県応援Tシャツを企画するなど、島根県のPRに貢献。2009年新春公開予定の『ビューと吹く！ジャガー』フラッシュアニメ映画で監督・脚本を手掛ける。

しかし一年も恨み節を唱えても、空から幸福が降ってくるわけでもない。仕事も遊ぶ所も無いから、自分で作るしかないと思いつつ、自分でする。それで……たつぷり時間をかけて考えていると（考える時間はたつぷりあったものですから）、こりゃアニメを作ったらどうかと思いつくんですよね。勿論アニメなんて作った事ない。でも時間ならたつぷりある。やれんじやないの？ うん、そう思う！

暇すぎて頭がおかしくなってきたのが幸いし、根拠のない前向きさの私はパソコンとアニメ作成ソフトを手にいれ、自分の身の回りの事、興味のある事、それらをグチャグチャと煮詰めながら作ったのです。で、完成したのが『菅井君と家族石』という「おバカなアニメ」。それを自分のホームページに掲出して放置していたら……四年後には東京で劇場アニメまで作るようになりました。

佐野史郎さんに錦織良成監督と、私の大先輩ばかりが巻頭を飾る本誌のコラムに、私ごときが寄稿だなんて本当に恐れ多いことですが、しかし常々感じている島根への感謝の気持ちを何かの形で表現せねばならないと考えていた矢先でのお誘いだっただけで、大変僥倖ながらお引き受けいたしました。貴重な機会をお与えくださいました、小泉凡先生に感謝申し上げます。

「不便さ」でした……。そんな私が血迷って、何か新しいことがしたい！ そう思い立ち、平田（現出雲市）の空き家を借りて生活を始めたのが二〇〇二年。見渡す限り柿畑。集落は十六戸しかなく、松江育ちの妻でさえヒアリング不可能な強烈なまでの出雲弁の近所の方々。「あげこげそげだわねあ〜おべたわあ！」「え、何言ってるんですか？」。そんな毎日ですよ。

怒り狂うスズメバチに巨大ムカデ、空飛ぶママシに冷酷な蛇、その他よく分からん生き物（特に味噌汁に必ず死のダンプを敢行する、緑色の小さな羽虫！ お前つてやつは！）が東京モンを嘲笑うかのように湧き出る！ 家の裏側には巨大タケノコが林立、こ……怖ええ！（タケ

ノコがあんなに巨大化するなんて！ スーパーで見かけるお前は、あんなにも小さく可愛いのにー）、憧れの広い庭は草むしりという苦役の地平。

島根の吉田です。みなさん、よろしく頼みますよ！



梶川理髪館

(鳥取県三朝町)

川井野々芳

■梶川理髪館は本来の意味での博物館ではありません。



鳥取県三朝温泉にある梶川理髪館。一見ただの理髪店ですが、このお店にはもうひとつの顔があります。それが、「理容史料館」。店内にはたくさんの理髪関係のコレクションが並んでいます。ご主人自ら、「世界床屋遺産」と名乗るのも納得です。

お店に入って一番最初に目に入ってくるのが、木馬の首がついた子供用のバーバーチェア（理髪椅子）です。このバーバーチェア、あまりに精巧に作られた馬の首がついているため、お店を訪れる子供たちには不人気ようです。座った方がいいが泣き出してしまいう子供もいて、この椅子に座って散髪をした子供は今のところわずか四、五人だそうです。

ご主人の梶川満さんは、このチェアをネットオークションで購入されました。一九二〇年代にアメリカで作られたこのチェア、約八十年も前に作られたものという点もあり、馬の鼻の部分が削れていたり、状態が悪かったようです。それを梶川さん自ら直し、また座ったときに足を置く部分は知り合いの鍛冶屋さんにも直してもらったなどして、今のとても美しい木馬にしたんだそうです。

梶 川理髪館に到着し、さあ取材！とお菓子をいただき、まずは一服させてもらいました。レトロな雰囲気の内店で抹茶をいただく……、なんとも贅沢なひとときでした。このとき貴重な年代物のバーバーチェアに座らしていただいたの

で、本当に贅沢で優雅な気分でした。今回、取材は店内に置かれているバーバーチェアに座って行いました。店内に置かれているバーバーチェアはほとんどがアンティークなんです。実際に散髪をするお客さんが座るバーバーチェアは、レトロなデザインの現代物なんです。普通の理髪店で使われているものと同じで電動式です。

それとは別に店内には本物のレトロチェアが置いてあります。手すりに見事なライオンの彫刻が彫られているチェアは日本製で、大正十年の製品だということです。明治初期に西洋理髪が日本に入ってきて、明治後期には本格的なバーバーチェア作りが日本で行われるようになります。バーバーチェアはデザインはイギリスだが日本製、というものが割りと多いようです。

このバーバーチェア、座り心地が抜群で、取材の間ずっと座っていました。散髪中ついつい眠たくなってしまいうのも、この椅子ならわかるなあと思いました。

梶川さんがコレクションを集める手段は、インターネットが多いそうです。「バーバー」「バーバーショップ」「ヘア」「シェービング」などの英単語でインターネット検索するんだとか。

インターネットの検索でそんな見つかるものかな……と、初めは不思議に思ったんですが、実は梶川さんのように理髪関係のものを集めている人は案外多いようです。



■(左)レトロチェアに座って取材。右がご主人の梶川満さん。(右上)子供用パーチェア。(右下)ブレイド・バンク。



アメリカにはNSMCA(ナショナル・シェーピング・マグ・コレクション)があり、約五百人のメンバーがいるんだとか。もちろん、梶川さんもこのクラブの会員で、東洋では唯一の会員なんだそうです。このクラブ、アメリカで春秋の年二回の会合が開かれており、梶川さんは今まで二回、この会合に参加されました。その会合の内容は仲間同士でコレクションの売り買いもありますが、自分のコレクションを見せ合う(というか、自慢し合う)ことが多いようです。実際に梶川さんが会に参加している写真も見せていただきました。とても楽しそうにアメリカの方たちと話している姿が写っています。梶川さんは「英語はあまり得意ではない」と話しておられましたが、「同じ趣味を持つもの同士、会話は何と

かなる」と話されました。梶川さんの一番自慢のコレクションは「シェーピングマグ」です。店内にもたくさん飾られています。この「シェーピングマグ」というのは、髭剃り用の石鹸を泡立てる容器のことで、形はマグカップそっくりです。しかし、そのカップには美しい柄、個性的な柄と様々な図柄が描かれています。この素敵な図柄のシェーピングマグは、主に十九世紀のアメリカのものです。

一八七〇年頃〜一九二〇年頃、アメリカの理髪店ではお店にお客さん一人一人専用のマグをキープすることが「衛生的である」ということで定着していました。初めはお客さんの名前入りマグだったのが、字の読めない移民たちのためにも、とマグに絵を描くことが定着していきます。ここで描かれる絵はお客さんの職業や所属する団体、会社をモチーフにすることが多く、「いい宣伝になる」「名刺代わりに!」と大流行したようです。ところが、一九一七年、アメリカが第一次世界大戦に参戦するとき、全兵士に安全カミソリが支給されます。それ以降、「髭剃りは自宅で」という流れになり、理髪店でマグをキープする人は少なくなりました。そうしてマグに絵を入れる文化も忘れられていき、美しいシェーピングマグは約五十年で姿を消したのです。しかし、個性的なシェーピングマグの魅力に惹きつけられる人は多いようです(もちろん梶川さんもその一人です!)、



■シェーピングマグ。右上にあるのがピアノの調律師のマグ。

一九五〇年代頃から「コレクターアイテム」として認知され、世界中でたくさんコレクターがいる品物になりました。理髪店というたくさんの人たちが集う場所で、「これは自分のシェーピングマグだ!」と主張するため、大体のマグが一点物で、凝った作品になっています。また、自分の職業が描かれていることが多い中で珍しい職業ほどお宝としての価値が高いそうです。梶川さんは「ピアノの調律師のマグ」をお持ちです。また、梶川さんはお持ちではないそうですが、「サーカスの綱渡りのマグ」なんてのもあるんだそうです。世界中にコレクターがいる「シェーピングマグ」。このマグを一人で百個持っていたら、「一流のコレクター」としてその世界では認められるという話ですが、梶川さんは約二百個持っている、とのこと!!「こんなに持っているのは、世



■映画『私は貝になりたい』に出演した髭剃りセット。

「世界でも数人でしょう」と自信満々に語っておられる姿が印象的でした。

シェービングマグの他にも、店内には美しい皿のような陶器が飾られています。これは「髭皿」と呼ばれるもので、西洋の理髪店ではあごの下にこれを当てて、服を汚さないように髭を剃ったそうです。十七世紀から十九世紀にかけて西洋で使われていたものですが、日本でも江戸中期には輸出用として伊万里で髭皿が生産されました。梶川さんは髭皿を約二十枚お持ちということで（もちろん古伊万里もある）、髭皿コレクターとしても自分はトップレベルではないか、と話しておられました。

今回、特別に髭皿体験ということで、髭皿を持たせてもらいました。陶器なの

で重量もあり、何より結構な値段のするものだと言ったので緊張しました。梶川理髪館のご主人・梶川さんはシェービングマグ、髭皿のコレクターですが、自分の理髪店を「理容史料館」と名乗られるだけあって、他にも理容関係の品物をたくさん所有されています。



■(上)髭皿。(左)髭皿をあごの下に当ててみる筆者。貴重な体験でした。

「ブレイド・バンク (blade bank)」と呼ばれる置物は、姿かたちは貯金箱そっくりですが、貯めるのはお金ではなく安全カミソリの刃です。昔は、使用済みのカミソリの刃をブレイド・バンクに貯めて処分したそうです。しかし、刃の使い捨てはもったいない、として「ブレイド・シャープナー (blade sharpener)」と呼ばれる刃の磨ぎ機も開発されました。

他には、ハリウッド俳優ジャック・パランス（『シェーン』という有名な映画で殺し屋役をやった人だそうです）の自宅の理容ルームに掛けられていた看板や、十九世紀中頃のアメリカ西部開拓時代の床屋の看板、といった珍しい看板が店内のあちこちに掛けられています。また、一九二〇年代アメリカの安全カミソリメーカーが得意先の理髪店に配った時計や文字盤が逆になった時計も飾られています。

たくさん年代物の理容関係の品物をお持ち



■西部開拓時代のものとされる看板。

この梶川さん。最近では、そのコレクションたちが映画出演することになったんだそうです。その映画とは、二〇〇八年秋公開の『私は貝になりたい』。主演がSMA Pの中居正広さんと女優の仲間由紀恵さんで、中居さんの髭を仲間さんが剃るシーンで、梶川さんが貸し出された「髭剃りセット」が登場します。この映画を見るときは必見です。

この博物館（といっても自称ですが）はもちろん入館無料です。ここでコレクションを眺めるもよし、散髪してもらうもよしです。お店が空いているときは、とつても話し上手のご主人・梶川さんのお話も聞けます。年間入館者（コレクションを見に来る人）は何と約千人！もいるんだそうです。世界でもトップレベルのそのコレクションを、ぜひ一度見に行ってみてはいかがでしょう。

（かわい・ののか／日本語文化系一年生）



和傘伝承館

(米子市淀江町)

今岡恭恵

■和傘伝承館は本来の意味での博物館ではありません。

八月のとても暑い日に私たちは鳥取県米子市淀江町にある和傘伝承館を訪問した。和傘伝承館は現在、淀江傘を作っている唯一の場所である。

和傘伝承館では「淀江傘伝承の会」という組織が活動している。「伝承の会」が発足したのは、平成二年のこと。もともと淀江という場所は、淀江傘という和



傘の産地だった。全盛期には沖縄から東北まで、全国各地から注文があったという。現在、ここでは淀江傘の伝統を生き残らせた継承しようと、実際に「番傘」と「蛇の目傘」と「踊り傘」の製作を行っている。

お話を聞いたのは、現在「淀江傘伝承の会」会長をいらつしやる

坂田弘さん。現在の伝承の会の会員は坂田さんを入れて、たったの三人だそうだ。

会員の一人の中谷佐和さんは、去年から会に入ったという若い方だ。坂田さんと話をしているうちに、坂田さんのもてで働きたいと思つて米子で勤めていた会社

をやめて、淀江傘伝承の会に入ったということだった。そんな中谷さんは私たちが話を聞いている間も、黙々と作業をこなして

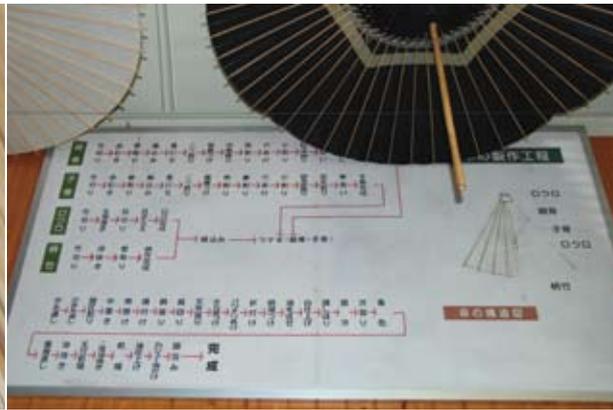
おられた。和傘伝承館といつても、和傘を作るための作業場で、内部には冷房がなく、坂田さんや中谷さんは汗だく

で作業をしておられた。もちろん、取材に行った私たちもすぐに汗がしたたり落ち大変だった。淀江傘の歴史は文政四年、倉吉屋周蔵という人が傘屋を開いたところから始まるという。その後、傘作りは淀江の産業のひとつとして発展していったそう

昔、淀江傘は山陰地方では一番たくさん売っていた。大正時代に十七万本、昭和二十年代のピーク時には五十万本の売り上げがあったほどである。しかし、洋傘が広まると和傘はだんだんと売れなくなり、一時期には七十九軒もあった傘屋は減り続けたのである。昔の淀江傘はとて



■和傘伝承館の工房風景。



■ (左)「ロクロ」に「骨」を糸でつなぐところ。(右) 製作工程図。

も頑丈に作られていて、叩いても投げても壊れない、と坂田さんは言う。頑丈に作られる理由として、日本海側の特徴的な気候である、雨や雪が多いこと、そして風がとても強いことがあるということだった。

淀江傘の特徴は、蛇の目傘の模様である。普通の蛇の目傘の模様は、丸くかた

どつてあるものがほとんどだが、淀江の場合は梅型・亀甲型といわれる形になる。また、傘の内側につく糸飾りも淀江独特のもので、桔梗飾りなどがある。

坂田さんが淀江傘伝承の会に入ってから作り始めたのは約五年前。当時、伝承の会では約六名の会員が和傘を作っていたそうだ。坂田さんが会長になってからの伝承の会は、淀江の傘ということに極めようと、古い淀江傘を集め、昔淀江傘を作っていた人に話を聞くなどして、昔ながらの淀江傘に近づこうとしている。昔、淀江の海岸で見られた和傘を干す「浜干し」も、年に数回ではあるがやっているそうだ。浜干しの目的は、和紙に引いた油を閉じ込めること。このとき重要なことは、無風の状態であること。風が吹いて傘に砂などがついてしまうとどうしようもないからだ。

伝承の会が作っている傘はすべて実用品として使うためのものである。実際に使っても大丈夫なように和紙には二回油を引くのだという。二回油を引くことで、和紙がかたくなるのだそうだ。だから、和傘を買っていく人には、実際に使うために買うのか、そうでないのかを聞きたくなるのだそうだ。雨に濡れることもなく飾りとして保管してあると、紙がもろくなって傘のためにはよくないからだ。

坂田さんのこだわりは、ほかにもある。傘の天井部分につくカッパに着物地を使うことだ。カッパにはビニールを使うこ

とが多いのだが、淀江傘では着物地を使う。また、手もとの部分の飾りにもこだわる。

伝承の会で傘を作るのに心がけていることは、考えながら作ることと数をこなすことだそうだ。それは、上達するのに必要なこともあるという。なんでも人に聞いて解決することは簡単だが、それではなぜそのようにするのか、何の意味があるのかを知ることができない。上達するためには自分の力で、考えるということが重要なのである。もちろん、こうしたことは数をこなすことによって達成できることである。

私たちが伝承館に取材に行った日、小学生の女の子が母さんと二人で和傘を作りに来た。夏休みが始まってから毎日少しずつ作っているのだという。私たち



■和傘作りに使う道具。



■和傘作りに取り組む小学生。



■紙張り作業を行う中谷さん。

は、自分が感じる以上にしっかりと糊を塗ることだ。踊り傘はその名のとおりに、踊りながら振り回したりして使う。そのため、紙が簡単にはがれないようにしっかりと骨につけておかなければいけないのだ。紙を張っていると、自分が中学校の運動会で風が強い中、傘を振り回しながら踊っていたのを思い出した。よく考えてみれば、あんなに風が強かったのに

作業を始めてから思ったこと

が見たときは、もうずいぶん和傘の形になっていた。私たちが話を聞いている間も、中谷さんに指導してもらいながら熱心に作っていた。

実際に和傘に紙を張ってみると、感じることも違うのではないかと考えていた。私も紙張りの体験をすることになった。私がさせていたのは、踊り傘の紙張り。ろくろから出ている骨に紙を貼り付けていく作業だ。踊り傘は一面に紙を張るのではなく、三列にわけて紙を張る。外側から列の間を数センチ空けて順番に内側に向かって張っていく。



■(上段) 踊り傘の紙張り作業を行う筆者。(下段) 取材現場。左側が会長の坂田さん。

紙は破けたり、はがれたりしなかった。私が紙を張ると一本に約二時間かかった。そんなに時間は経っていないようなのに、あっという間に時間が過ぎてしまった。集中していたんだと思う。できあがった傘を見て、紙を張るとい作業をしただけなのにとても誇らしい気分がした。

「職人を育ててくれるのはお客さん」これは坂田さんが私たちに教えてくださった言葉である。注文するときに「すべてお任せします」と言われると、職人の血が騒いで思いつきり遊んで作るのだ。

そうだ。遊ぶことで自分の腕を上げることもできる。しかし、和傘一本にかかってしまう金額は定価の倍以上になってしまっている(もちろん、それでも定価で売るのが)。坂田さんのそんな言葉から、淀江の傘を作り、守り続けるという強い信念を感じた。

(いまおか・やすえ／文化資源学系二年生)

祐生出会いの館

(鳥取県南部町)

小松みさ



鳥取県米子市の南側に位置する南部町に、「祐生出会いの館」という小さな博物館がある。版画家であり、同時に希少なコレクターでもあった、板祐生（一八八九～一九五六年）の作品と蒐集品を所蔵・展示する博物館である。周りを山とダム湖に取り囲まれた静かな場所にある。

「祐生出会いの館」は、外観はこぢんまりとした建物だが、奥行きがあつて、中は意外と広い。館内には五つの展示室がある。第一展示室では祐生の生涯を紹介し、第二展示室では彼が集めた代表的な郷土玩具を、第三展示室では彼自身の版画作品を、第四展示室では定期的に入れ替えられる彼のコレクションを見ることが出来る。私たちが取材で訪れたときは、ビールのポスターが展示されていた。もうひとつは特別展示室で、祐生だけでなく多様なジャンルの企画展示が行われている。

祐生出会いの館
 ■開館時間：午前9時～午後5時
 ■休館日：火曜日、12月29日～1月4日
 ■入館料：一般300円、高校・大学生200円、中学生以下＝無料



■ (左) 出雲の天神。(右) 大山の竹馬。

板 祐生。——彼はどのような人物だったのか。祐生は明治二十二年、鳥取県西伯郡東長田村（現南部町）に生まれた。十五歳で代用教員となり、やがて教員資格を得て小学校の先生となる。祐生は学校の先生、版画家、それにコレクターという三つの顔を持っていたわけである。

生前、祐生が集めたコレクションは実に幅広く、その数、四万点にも及ぶそうだが、その代表とされるのが郷土玩具である。今ではあまり見られなくなった土人形やこけし、姉様人形（和紙でできた



薄い紙製の人形)などの人形をはじめ、さまざまな玩具を蒐集した。「出雲の天神」や「出雲の阿国」、大山が国立公園に指定された際に作られたという「大山の竹馬」や「因伯牛」などが目を引いた。祐生には二人の娘がいたが、長女は十歳で、次女は二十歳でこの世を去り、その後は妻さきのと夫婦二人きりの暮らしであった。彼は子どもを亡くし、ますます玩具蒐集に没頭していった。玩具を集めることによって、自身を慰めていたようである。ただ、こけしについては、あまり愛着が持てなかったのではないかと言われている。

これらの玩具はすべて、友人や知人からの「いただきもの」である。当時、交通事情がなにかと不便であった時代の中、遠出ができるほどの資金がなかった祐生は、その交友関係を広げる手段に「文通」を使っていた。彼は「いただきもの」の郷土玩具などを版画作品にし、手紙と



■祐生が作った「貼り込み帖」。中央に貼られているのが「来間屋生姜糖」のラベル。祐生はこのような帳面を60冊ほど残している。

ともに全国各地の友人・知人に送り、これがまた彼の蒐集ネットワークを広げていったようである。彼が玩具とともに蒐集に力を入れていたのはポスターで、その数は千四百枚にものぼる。今日でも有名なビール会社や百貨店の宣伝用ポスター、保険会社や博覧会のものなど、実にさまざまである。博覧会ポスターの中には、昭和五年に開催された松江市菓子博(全国菓子共進会)のポスターもあった。

戦

前戦中の選挙ポスターや、軍部や政治的な主張が強く押し出されたポスターもある。「満州国」から持ち帰られたものもかなり多い。満州から日本へ持ち帰ったポスターはたいいてい政府に押収されたらしいが、これらは何らかの形で、知り合いや友人の手から祐生の手に渡ったようだ。現在では、満州についての歴史的な研究のため「祐生出会館」を訪れる人もいる。そう、貴重な研究資料として役立っている。

祐生はこれらのポスターをどうやって集めたのか。知り合いに頼み込むか、ビール会社や問屋、百貨店などに直接連絡を取って手に入れていたようだ。

百貨店では季節ごとに服や品物の新作宣伝用ポスターが作られていたため、百貨店へ自ら連絡し、予約してまで入手していた。ポスターに限らず、いつ、誰にももらったか、といった情報はすべて細かく日記に残されている。

祐生が集めていたものは玩具やポスターだけではなく、酒やお菓子などの食品のラベルや包装紙、乗車券や旅のしおり、駅弁の掛け紙、千代紙、カルタ、切手、マッチ箱など、驚くほど多彩である。これらのうち紙の印刷物は、祐生自身の手によって作られた「貼り込み帖」と呼ばれる和紙でできた帳面に、いねいに貼り付けられている。

昔からある、地元の有名な酒屋さんや和菓子屋さんの古いラベルや包装紙などは、お店の方にとっても貴重なよう

実際に昔の自店のラベルを見にくる方もいるようだ。平田の来間屋生姜糖本舗のご主人は昨年の『のんびり雲』の取材の際、「祐生出会館というところ、うちの昔の包装紙があった」と教えてくださった。最近では、松江の和菓子屋、



■鉄道の乗車券や汽船の乗船券。回数券もある。



■駅弁の掛け紙や酒のラベルなど。



■(上段)ろう原紙、ヤスリ、鉄筆など。(下段) 謄写版、ローラーなど。

彩雲堂の方が自分のところの昔の包装紙を見に来られたそうだ。

松江の酒屋さん、「國暉」のラベルを見つけた。酒好きの編集長は「國暉」と表記されているのを発見し、「いつから『暉』に変わったのかなあ」と首をひねっていた。その他、「浜田名物百合羊羹」などと首を傾げるような、実にユニークなものも見つかった。

米子駅で有名な駅弁のお店、米吾のこ



■蔵書票。

れまた古い駅弁の掛け紙もあった。江戸時代享保年間、米問屋として出発した米吾。駅弁の製造販売を始めたのが明治三十五年で、この道でも長い歴史を持つ。駅弁の掛け紙あれば乗車券あり。当時の山陰線、一畑電鉄、果ては合同汽船のものまで、珍しい乗車・乗船券がいっぱい。乗車券は出雲や鳥取など近い場所のものが多い。

祐 生のもうひとつの顔は版画家である。彼の版画は孔版画だった。私

たち若い世代は見たことも聞いたこともないが、「ガリ版」とか「謄写版」と呼ばれるものである。コピー機が登場するまで、学校などでプリントを作るときに用いられてきた。「ろう原紙」と呼ばれる紙をヤスリ板の上にのせ、鉄筆と呼ばれる先の尖ったペンで文字や絵をかいていく。その後、謄写版に「ろう原紙」を

張り、その上からインクをついたローラーを転がすと、鉄筆でひっかいて「ろう」が取れた部分からインクが紙に浸透し、紙に文字や絵が印刷されるという仕組みだ。出来上がりは決してきれいなものではなく、ガリ版の孔版画はもとも芸術としての版画を制作する技法ではなかった。

祐生は、ガリ版印刷の手法に工夫を加え、独自の製法で作品作りを行ったとされている。彼はヤスリを使わずに直接小刀で「ろう原紙」を思い思いの形に切り抜き、インクを紙に直接のせるという方法を編み出した。このことにより、従来の孔版画に比べて色合いが鮮明になるのだそうだ。彼の作品は特に、強烈で鮮明な赤色が特徴的であるという。

祐生は孔版画を用いて私家本も作った。『おもちゃと絵馬』をはじめ、『富士の屋草子』という全三十九巻の大作や、玩具を入手した経路や時代考証を記した『髪髪歎賞』（全六巻）など、たくさんの作品を制作した。

祐生には、孔版を用いて蔵書票を作るという長年の夢があったようだ。蔵書票というのは、自分の蔵書であることを示すために見返しに貼っておく小さなラベルのことである(『のんびり雲』創刊準備号の記事「紙の宝石」参照)。彼は、友人や知人から会員を募り、昭和二十四

年に「板祐生孔版蔵書票の会」ができて、五十人分の蔵書票を作り上げた。これらの蔵書票はすべて切り抜き技法で作成されており、祐生孔版画独特の美しさが小さな紙片に凝縮されている。

昭 和三十一年に祐生が亡くなった後、地元の方々の協力により、彼の膨大なコレクションと作品は公民館に保管されることになり、やがて「祐生出会の館」という博物館が建設されることになる。ひとりの人間が蒐集し、制作したものが、こうして小規模であったとしてもひとつの博物館として成り立つことは、すごいことだと思える。さまざまな人間の協力があったからこそ残る、尊いもの存在を見た気がした。

(ごまつ・みさ/日本語文化系一年生)



■私家本と自筆原稿。

祝風高橋

(出雲市大社町)

桑原由紀子

■祝風高橋は本来の意味での博物館ではありません。

出雲大社の左手に鶴山、右手に亀山という山があり、鶴山の麓には千家、亀山の麓には北島という、出雲大社に仕える二つの国造家がある。かつては両家に関係のある家に祝い事があると、それぞれ「鶴」または「亀」の字を描いた凧を揚げて祝っていた。この字凧は量何量分もある巨大なものだったようだ。しかし、明治になって電柱が林立するようになると、この凧揚げの風習は廃れていった。

こうした歴史ある大社の祝風を小型化して復活させ、製作・販売を行ってのが出雲大社から程近いところにある「祝風高橋」である。現在の製作者である高橋日出美さんの祖父の高橋好さん(大社町無形文化財第一号へ世界とともに町へ返還)が今から五十年ほど前に始めた。

高橋好さんは郵便局を退職したのちに、和傘や提灯の製造販売に携わる一方、大社町に古くから伝わる「じょうき」の復元製作を開始した。「じょうき」というのは、盆の精霊送りの際に作られたもので、鯛や屋形船の形をした灯籠船のことである。そして、じょうきに続いて取り組んだのが祝風の復元である。これらは、いずれも竹細工という点で共通している。

祝風は学校の先生だった橋本さんという方の目にとまり、郷土玩具専門誌である『竹とんぼ』第七十一号(昭和四十年十一月)で紹介されたために全国的に知られることとなった。橋本さんが記事中で「祝風」と表現したのが広まり、以後、大社の鶴・亀の字凧は「祝風」と呼ばれるようになったのだという。なお、じょう

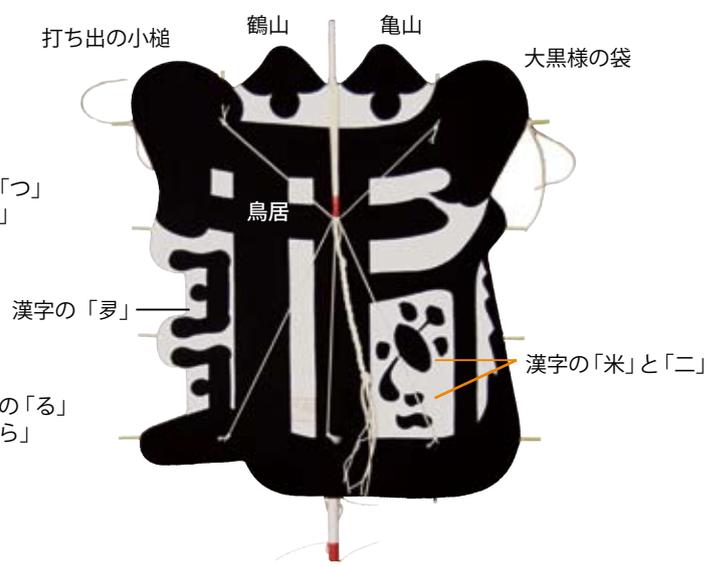
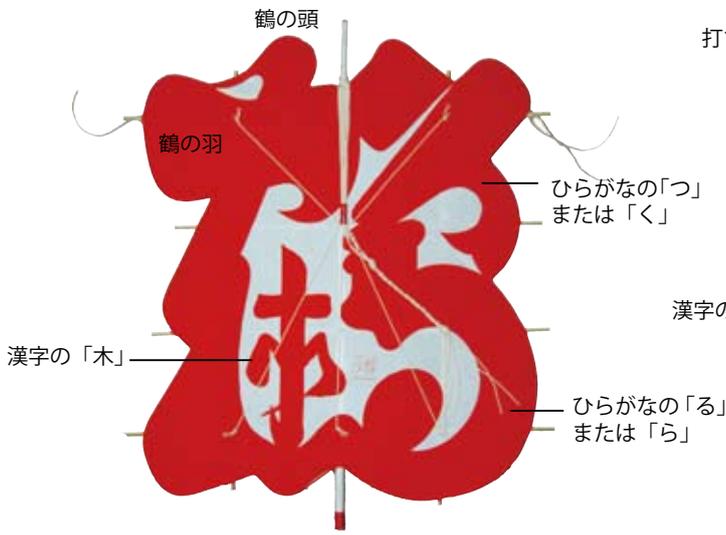


■祝風高橋の店内に飾られた大凧。

うき、祝風ともに昭和五十六年に「島根県ふるさと伝統工芸品」に指定されている。

鶴の字も亀の字もさまざまな意匠を凝らした絵文字である。鶴の字の左側は、鶴が木にとまっているところを

表現している。左上は鶴の頭を、その少し下が鶴の羽を表し、その下に漢字の「木」が配されている。右側は縦に「つる」とひらがなで書かれている。これは「くら」とも読めるそうだ。「くら」は「蔵」を表しており、穀物や家宝などを連想さ



■竹の型取り。

せるため縁起のよい言葉とされている。
亀は旧字体の「龜」を図案化したものである。上の二つの山のような形は、それぞれ「鶴山」と「亀山」を、その下の縦二本、横二本の直線の交わりは鳥居の形を表現している。左上の方にある膨らみは「打ち出の小槌」を、右上の方のはねは「大黒様の袋」を表しているそうだ。左下部分は「多」の旧字体「冫」にも読める。また、右下は「米」と「二」という字であり、これは米俵二俵を表しているらしい。

鶴は赤、亀は黒で描かれる。また、鶴山と亀山の位置関係から、飾るときは鶴の凧を左に、亀の凧を右に飾るのが望ましいそうだ。昔の凧と現



■ご主人の作業場の一角。

在の凧とは若干形が異なっているし、同じ人が製作したものでも年代によって多少形が変わっているらしい。製作者の感性の変化が影響しているのかも知れない。

祝凧や「じょうき」の製作に欠かせないのが竹だ。竹は夏場に処理すると虫がついて使えなくなるため、冬の間一年分の竹を処理しなければならぬ。竹の表面に傷がつくと曲げたときに折れてしまうため、細心の注意が必要な作業だ。冬の間処理した竹は、春までに型を取って、できたものはビニールの中に入れて保管する。

その後の製作手順は次のようになっていく。

- ①型取りをした竹を組み合わせ、これに紙を巻いた心棒を取り付け骨組みを作る。
- ②四角い紙を貼り、縁を残しつつ型に合わせて紙を切っていく。
- ③縁を折り曲げて貼り付ける。
- ④型に合わせて文字を書く。
- ⑤糸取りをして完成。

この中でもっとも心を砕く作業は④の「文字を書く」だそうだ。日出美さんは直線部分に定規を使用するなどして、よりよい形にしようと気を使っておられる。そのほか、文字を二度塗りして濃淡が出ないようにするなど、さまざまな工夫が試みられている。昔作られた凧は一度書いただけなので濃淡の差が目立つ。こちらが味があつていいようにも思えるが、そのあたりは好みの差だろう。



■作業場。上の方に置いてあるのが「じょうき」。



■（上段）「亀」の字を書くご主人。（下段）糸取り作業中の奥さん。

⑤の糸取りとは凧に糸をつける作業である。現在の祝凧は揚げるのではないので、糸は飾りの要素が強く、厳密にバランスをとる必要はないが、けっこう手間のかかる作業だ。

祝 凧は島根県物産観光館でも販売されている。物産観光館には以前から出品していたが、数が作れなかったため常に品切れのような状態だったそうだ。だが、今ではこうした状態は解消された。日出美さんが去年会社を退職して、凧作りに時間を割くことができるようになったためだ。

実は、日出美さんは、祖父・好さんと同様（実はお父さんもそうだった）、若いときから凧作り専門の職人として働いてきたわけではない。会社に勤めながら土日などに凧を製作していた。このため数をこなすことができず、お客さんが訪ねてこられても売り物がなく、後日郵送ということが多かったらしい。

日出美さんが退職したのは、お店のほうにも常にある程度は品を置けるようになったらしいが、取材したときはちょうど出雲大社の本殿公開期間中で、お客さんがどっと増えたため再び後日郵送の状態になっていた。

高橋家では代々、奥さんも凧作りの重要な担い手だった。現在は、日出美さんが比較的大型の凧の製作を、妻の百合子さんが比較的小型の凧の製作と糸取りを行っておられる。作業場もそれぞれにあつて、お店に入つてすぐのところ、百合子さんの作業場が、奥の方に日出美さんの作業場がある。作業機に向かっている百合子さんは、お話をうかがっていたときと同じような自然体で、凧作りが日常に溶け込んでいっているように感じられた。

「伝統を受け継いでいくことを重荷に感じることはないです」といふご主人。日出美さんは「子供か」という質問に、日出美さんは「子供のころから祖父や父が祝凧を製作しているのを見て育ってきたので、そんなふうを感じることはありません」と答えてくださった。百合子さんも「嫁いできた時が祝凧の全盛期だったために、自然と伝統を守つていこうという意識が生まれませんでした。祝凧の製作が面白いかどうかはわからないが、県外の人に『まだ作っていますか』などと言われると、『作らねば』と思います」と言っておられた。

お二人からは「伝統を守つていかなくでは」という義務感よりも、「伝統は守つて当然のもの」というような自然な構えを感じた。本来、伝統とはこのように守られていくものなのかもしれない。

（くわはら・ゆきこ／文化資源学系二年生）



飯南町民俗資料館

(島根県飯南町)

権原 希・鹿野 一厚



雪。——この言葉を聞くと、私はワクワクしてしまいます。雪だるま・雪合戦・そり遊びなどの冬の遊びが、頭に思い浮かぶからです。しかし、その雪も多量に降り積もれば、生活に支障を来すことになりません。雪に閉ざされた生活を少しでも快適にするために、全国の積雪地帯で雪対策の生活用具が作られました。旧飯南町にある飯南町民俗資料館には、西日本で作られた「雪の民具」が展示されています。

今回の取材に伴って、私は初めて頓原の地を踏むことになりました。雪が多く降る地域と聞いていたので、どんな所なのかとても気になっていましたが、実際に訪れてみると、山々が間近に迫ってはいますが、民俗資料館がある地区は大きく開けた谷に位置していて、とても景色のよい場所でした。

まず最初に、飯南

町の教育委員会にお邪魔しました。今回、民俗資料館を案内していただく石飛幹祐さんは、この教育委員会の職員であり、民俗資料館に小学生を招いて説明するといった活動もなさっています。

民俗資料館の成り立ち

飯南町民俗資料館は、鉄筋コンクリート高床式二階建ての、まるで白壁の土蔵のような建物です。風通しの良い網戸を開けて中に入ると、冷房はないのですが、外気より少し涼しいと感じます。五〇〇点以上の民具を収めた館内は、しんと静まり返っていました。

飯南町民俗資料館
 ■開館時間：午前8時30分～午後5時
 ■休館日：土曜日・日曜日・祝日、年末年始（予約対応あり）
 ■入館料：無料
 ※入館を希望される方は飯南町教育委員会へお越しください。
 TEL：0854-72-0301（飯南町教育委員会）

まず、石飛さんから資料館の成り立ちについて説明をしていただきました。勝部正郊という高名な民俗学者が、昭和三十五年から雪に関する民具の収集と整理を開始していました。昭和四十三年に、それらの民具一五〇点が国の重要民俗文化財に指定されました。勝部さんは当時頓原に住んでいたため、旧頓原町がそれらの民具を勝部さんから一括して寄贈を受けました。そして昭和四十五年五月、民俗資料館を建設して貴重な雪の民具を展示することになったのです。

飯南町は雪国だった

中国山地の一角を占める飯南町は、同じ山陰でも松江などの日本海沿岸と違って「豪雪地帯」です。『頓原町誌』によると、昭和四十七年から平成七年までの年平均降雪量は、頓原で三九二・〇センチ、赤名で四〇五・九センチでした。毎年四メートルもの雪が降るなんて私には想像もできませんが、昭和五十年代以前は今よりもっと積雪量が多く、「約四ヶ月近くが雪のしたの生活であった」（『故郷の味覚』）そうです。

昭和三十八年には日本全国で大雪が降り、気象庁が「昭和三十八年一月豪雪」（略称「三八豪雪」）と名前をつけたほどでした。飯南町頓原でも短期間のうちに最高三・三〇メートルもの雪が降り積もり、死者一名、重傷者一名、家屋全壊五棟、被害総額約一億一五〇〇万円という大きな被害をもたらしました。

飯南町民俗資料館には、飯南町とその周辺地域を中心として、北は京都府から中国山地、そして南は九州山地にまでいたる、西日本の積雪地帯から集められた雪の民具が収められています。東日本の雪の民具を収蔵した新潟県長岡市の科学博物館とならんで、日本有数のコレクションを誇っています。

雪スキ

館内でまず目につくのは、「雪スキ」です。雪スキは木で作られていて、一見して長い柄の付いた大きな羽子板のような道具です。直径約三センチ、長さが九〇センチから一五〇センチの「柄」の先に、幅約二〇センチで長さ約五〇センチの厚手の「板」が付いています。これが何のための道具か、お分かりになりま

すか。そう。屋根に積った雪を取り除くための道具なのです。

屋根の雪を除雪することを、中国山地では「雪落とし」と呼びます。雪国の家はかなり強く造られているので、雪が二、三回降ったぐらいでは平気ですが、さすがに七〇センチを超える雪が屋根に積もると、屋根裏の梁が不気味にきしみ、戸や障子の開け閉めがとみに苦しくなります。こうなると、雪落としをしなくてはなりません。雪スキは、雪から家を守るための必需品だったのです。

雪スキはシンプルな道具なので、それほど種類はないだろうと思っていたのですが、民俗資料館の雪スキは、なんと一四種類もあるそうです。このうち三種は板に柄を取り付けたものですが、他の一一種は一本の木を削ったものです。この一一種は板の形

と柄の長短に基づいて分類されていて、なで肩で細長い「先角一般形」と長楕円形の「楕円一般形」のほか、「肩角形」、「先広形」、「細長形」、「シャクリ形」などの名が付けられています。

雪スキの基本的な使い方は、まず板を包丁のように

使って雪を切って四角いブロックを作り、次にそのブロックを板の上に

拵って載せ、最後にブロックを屋根の上を滑らせながら下に落とす、というものです。これらの「切る」「拵う」「滑らす」のほかに、雪スキは、「叩く」「押す」「コネル」などの働きもこなします。シンプルな外見からは想像できないほど、雪スキは屋根の上で多彩に使われているのです。

「一般形」の雪スキだけでも、これらの働きを一通りこなします。しかし、先ほどの「肩角形」や「先広形」など他の種類の雪スキは、それぞれが得意技を持っています。例えば、板の幅が広い「肩角形」は、一度に

大量の雪を動かすことができます。先が少し広い「先広形」は、雪をこねるのに便利です。柄も板も長い「長板形」は、大雪のときに威力を発揮します。このように、一つひとつの働きをより効率よく便利に行うことができるようにと人びとが工夫した結果、様々な種類の雪スキが生まれたのです。

中国山地では、昭和の初期までには雪



■雪輪。

スキはスコップにとつて代わられました。現在でも大雪が降ると雪スキを愛用する人は少なくないそうです。

雪輪

資料館が次に力を入れているのが、「雪輪」の展示です。雪輪とは、雪の中を歩行するときに、足が深く入るのをさけるために、はきもの下につける道具です。



■雪グツ。

一般に「カンジキ」と呼ばれていますが、中国山地では「雪輪^{ユキワ}」とか「輪^ワ」などと呼ばれています。雪輪はこれに代わる道具はなく、現在でも現役で使い続けられています。

雪輪の構造も比較的シンプルで、粘りのある木や竹を曲げて作った外枠(「枠」と、内側に張った縄紐からできています。縄紐の部分を細かく見ると、足を乗せる「乗緒^{のりお}」、枠の隅を結んで枠を補強する「隅取り^{すみと}」、つま先を掛ける「鼻緒^{はなお}」、そして足全体を雪輪に固定する「締紐^{しめぢ}」からなっています。

雪輪の基本的な構造

はシンプルなのですが、民俗資料館に展示されている標本を見ると、実に多様な雪輪があることに驚かされます。

枠の形だけでも、円形のもの、楕円形のもの、長方形のもの、先広がり



■ツマゴワラジ。

円形のもの(「足型」と呼ぶ)、中央がくぼんだ楕円形のもの(「繭型」と呼ぶ)と、五つの形式があります。そのうえ、一つひとつ、大きさや反り方にも工夫が凝らされているようです。また、縄紐の組み方も多様で、「横一文字」「横一文字四隅取」「十文字」「井桁」など、基本形だけでなく二〇種類もあります。

雪輪は、降ったばかりの雪を踏み固めて道を作る「雪踏み」にも用いられます。平地の雪踏みのためには、大形の雪輪や乗緒が複雑な円形の雪輪が用いられます。また、山仕事をしたりウサギ猟をするときなどは、反りがあつて横一文字の小さな雪輪が、歩きやすくて疲れにくいそうです。目的や雪質などに応じて様々なタイプの雪輪が工夫され、使い分けられているのです。

その他の民具

雪スキと雪輪のほかにも、民俗資料館の一階には様々な民具が展示されています。藁を編んで作ったかわいい「雪グツ」。雪グツの中に履く、これも藁製の「ツマゴワラジ」。野外での活動に欠かせない「カサ」と「ミノ」。小説で読んだことのある「赤ゲツトウ」。

雪の民具の魅力

民俗資料館に収められている雪の民具は、ほとんどが大正時代以前に使われていたものです。そのなかには、江戸時代に作られたものもあります。そのうえ実際に生活の場で使用されていたものなので、新品のような派手さはありません。

しかし、立ち止まってよく眺めると、作られてから八十年以上も経た地味な民具たちが、とつとつと語り始めるのです。囲炉裏のそばでおじいさんが夜なべでこしらえた雪グツやワラジ。湿って水分を多く含んだ飯南町の雪道を、より快適に歩けるように深めに作られています。朝の雪踏みを少しでも楽にするために、靴底の面積を大きくした、炭俵のような雪グツもあります。雪の中を歩いて、藁で作ったツマゴワラジを素足に履いて

いると凍えないなんて、初めて知りまして。すごい知恵です。

ミノはよく知られていますが、資料館のミノには網が裏打ちされていました。ミノと衣服との間に空気の層を作って、体温と汗を逃がそうという工夫です。私は、これを見た瞬間に感動してしまいました。

一つひとつの民具に込められた、製作者の知恵と工夫、そして愛情と思いやり。民具たちと語り合うために、ぜひ皆さんも、飯南町民俗資料館に足を運んでみませんか。

(むくげはら・のぞみ／文化資源学系二年生 & しかの・かずひろ／生態人類学)



森崎窯業 鬼瓦工房

(大田市温泉津町)

高田彩香

■森崎窯業鬼瓦工房は本来の意味での博物館ではありません。



島根県石見地方は愛知県三河地方に次ぐ全国第二の瓦生産地である。石見地方の瓦は石州瓦、三河地方の瓦は三州瓦と呼ばれている。石州瓦製造会社は現在九社あるが、今回は大田市温泉津町にある森崎窯業を訪ねた。お目当ては鬼瓦工房である。

鬼瓦を製作する職人を鬼師と呼ぶ。石州瓦製造会社九社のうち、鬼師がいるのは四社だそう。ここ森崎窯業の鬼師は宮本好明さんという、この道二十年のベテランである。鬼師という名前からは想像出来ないほど笑顔の素敵な優しい方だった。

普通の瓦(棧瓦など)は現在では巨大な機械・装置がたくさん並ぶ自動生産プ

インで製造されるが、鬼瓦は工場の一角にある小さな作業場で鬼師が手作業で作る。鬼瓦だけでなく、棟飾りや水板など、凝った形の注文生産品はすべて鬼師が手がける。

鬼 瓦工房に入ってまず目を引いたのが製作中の鯉の棟飾りだ。大きい。二つのパーツに分かれているが、つなぐと高さ一メートルぐらいいはなりそうである。棟飾りとは棟線を葺く瓦(雁振などと呼ばれる)のうち、上部に特別の飾りがついたものことだ。舞鶴の小学校からの依頼で作っている。送られてきたたった一枚の写真を見て作るのだという。写真から立体を作り上げていくというのはすごい技術だと思った。

この鯉の棟飾りは乾燥段階に入っていた。二週間から三週間、乾燥させる。しかし、乾燥期間の間ずっと放っておくのではなく、とても気を配らないといけない。あまり急に乾かしてしまうと、乾き具合が部分ごとでまちまちになってしまい、割れてしまう。それを防ぐために、何と、わざわざお湯をかけることもあるという。

工房には七枚一組で作られた龍もあった。これも乾燥中だった。これは水板と呼ばれ、棟の下部に横に並べる飾りである。水板は龍のデザインの注文が一番多いという。顔や体はとても緻密に作られており、今にも動き出しそう。牙や鱗も一つ一つ細かく作られている。目もまるで生きているかのようにリアルだ。角



■鯉の棟飾り。

は長く伸びているが、この中に芯となるものは入っていないそう。入れても焼くときに溶けてしまうので、中は空洞になっているという。また頭の内部も空洞にして、乾く速度を同じにする働きと、焼くときにむらができ割れるのを防ぐ働きがある。

宮 本さんは私たちの質問に答えながら、実際に鬼瓦のパーツを作らせてくれた。原寸大の模様が描かれた紙を粘土の板の上に置き、木べらを使って慣れた手つきで粘土に模様を描いていく。絵を描いた部分を粘土板から切り出すと、今度は別の粘土板を絵の形に合わせて直角にくっつけていく。

引っかけ傷をつけておく。さらに接着を強化するため、接合した角の部分を内側と外側の両方、へらで押し溝をつくり、そこに棒状の粘土を埋めていく。これにはベースの粘土よりも少し硬い粘土を使うそうだ。それは、焼き上げるときに、柔らかい粘土は硬い粘土よりも縮み

やすいという特性を考慮してのことだという。どれだけ縮むかを計算して作るというのは、宮本さんのように長年焼き物と向き合っていないとできない技だなど思い、ちよつと感動した。

鬼瓦は本来魔よけの意味で作られていた。しかし、次第に装飾の意味合いが強くなってきたという。面白いことに、怒ったような顔のもので、鬼瓦かと思っていたら、時代によっては鬼が笑ったものもあるという。もちろん、今では鬼以外のものも多い。宮本さんもこれまでに数え切れないほどの種類の鬼瓦を作ったそうだ。

工房の天井近くには三方に棚があり、家紋を作るための石膏型が所狭しと並べられ



■さまざまな形の「へら」。

ている。鬼瓦には家紋を入れることも多く、その部分は石膏型で作るのだ。同じ家紋でも大きさがいろいろあって、全体では膨大な数になる。基本的には丸型のものが多いが六角形のものもあった。出雲大社の神紋も六角形だ。

■粘土を伸ばす道具「たたき」。



宮本さんは鬼師になる以前は、大阪で二十年以上、左官をされていた。Uターンして鬼師の道を歩むことになるが、師匠はお父さんだった。宮本さんのお父さんは森崎窯業で鬼師として働いておられ、以後三年間、師匠と弟子としていっしょに働いた。ただ、師匠といっても粘土の硬さとかを教えるというだけで、作り方や技術を聞くということはなかったそうだ。すべて自分で工夫しながら習得していく。師匠の方も仕事を見せないことが多いという。

と話しておられた。それには最低十年はかかり、それでも十分ではないそうだ。これでもう独立という境目はない。

宮本さんは、いたってシンプルなお道具を使ってあらゆる注文に対応していく。宮本さんのところには各地から依頼が来る。注文を受けて実際に現場に行くことはあるのかと尋ねると、それはないと言われた。依頼者から送られてくるのは写真や全長の寸法など、実に大まかなものが多いそうだ。自分が作っているものが依頼者の要望に合っているのかという不安にかられることはないだろうか。でも、そんな心配は無用のようだ。これも長年



■家紋の型枠。



■石見銀山の世界遺産登録を記念して、こんな商品も企画・発売。

鬼瓦に携わらないとできないことだと感じた。
ここで道具を紹介する。まず、粘土を伸ばしていく作業に使うたきだ。これは全長約五〇センチで、オール先端のような形をしている。次に粘土を均等な厚さに切るために使う道具。同じ高さの二本の木の棒にピアノ線を張り、それを板の上でスライドさせて切っていく。そして粘土に模様を描いたり、丸みを帯び

た形を作ったりするときを使うへらがあ
る。へらの素材はいろいろで、主に木で
作られているものと、金属で作られたも
のに分けられる。鬼師という特殊な職人
が使うものなので特注品かと思ってい
たら、市販の道具を使っていると知り、意
外だった。
粘土の成形が終わると、釉薬をかけ
る段階に入る。釉薬の原料は長石
や石英、粘土、石灰、ケイ石などで、ま



■慣れた手つきで鬼瓦を製作する宮本さん。見る見る形ができてあがっていく。

ことができた。日本家屋には欠かせない瓦であるが、普段はそんなに深く考えたことはなかった。また、島根に石州瓦というものがあることは知っていても、どんな特性があるのかなど、詳しいことは知らなかった。こんなに素晴らしい伝統産業の現場を実際に体験し、地元を見直すよいきっかけになった。

(たかた・あやか/生活文化デザイン系一年生)

た着色材料として鉄やマンガンなどの金属を入れたりする。石州瓦は来待石を粉末にしたものを釉薬として使い、赤い色を出すという。
続いて瓦工場も見せていただいた。原料の粘土を搬入するところから、瓦が焼きあがるところまで、大きな機械・装置がたくさん並んでいる。瓦工場がこれほど巨大なものとは思わなかった。できあがった瓦には森崎窯業のマークや製造日、JISマークなどが刻印されていた。
石州瓦は四〇〇年を超える歴史がある。石州瓦は高温で焼きあげるため、なんととっても硬く強い瓦に仕上がるのが特徴で、塩害や酸性雨、凍害にも強い瓦として有名だ。石州瓦は一二〇〇度以上で焼き上げる。瓦の三大産地は三州瓦、淡路瓦、石州瓦であるが、その中でも温度の高さはトップだ。
今回の取材で初めて瓦を身近に感じる



■瓦工場。瓦が成形されて出てきたところ。